

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：32205

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531133

研究課題名(和文) 若者を排除しない地域社会へ 若者支援とまちづくりの融合へ向けた総合的研究

研究課題名(英文) How do we include Youths in our local community?

研究代表者

山尾 貴則 (YAMA0, Takanori)

作新学院大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：80343028

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、若者の社会的自立を阻害する要因および社会的自立に関して若者たちが経験している困難の内実を理論的実践的に検討するべく実施された。まず研究代表者が栃木県宇都宮市の地域若者サポートステーションである「若者ミーティング」のスタッフとなり、若者の語らいの場を運営して若者たちが直面している困難の内実を具体的に把握し、そうした困難がいかなるメカニズムによって生じてしまうのかを理論的実践的に検討した。次に、日本と同じく東アジア地域にあって若年層を取り巻く社会的環境が日本以上に厳しい韓国における若者自立支援活動の現状を調査した。

研究成果の概要(英文)：Why do youths can't success social independence? What difficulties do youths experience? This study aims to clarify those questions. First, I tried to clarify the difficulties of youths by participating to 'Youth Meeting' as a staff. Second, I surveyed youth support activities in South Korea.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：若者自立支援 ニート 排除型社会 再帰的自己

1 . 研究開始当初の背景

報告

2003 年より我が国において策定された「若者自立・挑戦プラン」を皮切りに、若者の就労のみならず広い意味での自立をいかに支援するかということが大きな社会的課題となって久しい。

当初は若者への支援は就労の領域に重点が置かれていたが、若者が抱える困難が多種多様であり、単なる就労支援では十分な効果をあげることが難しいということが明らかになってくると、「若者自立塾」や「地域若者サポートステーション」など、就労支援にとどまらないより幅広い支援プログラムの提供へと支援のあり方がシフトした。

そうした支援機関においていかなる支援を行うことが効果的か。このことについて、若者たちの対人関係能力の向上に資する支援をすることが必要だとの主張が繰り返し語られてきた。だが報告者は、すべての若者がそうした能力を向上させていった先には対人関係能力のインフレとでもいうべき状態が生まれ、脱落者を再生産させるおそれがあると判断し、若者支援の別様のあり方を模索しようとした。

そこで報告者は栃木県宇都宮市の地域若者サポートステーションである「とちぎ若者サポートステーション」(以下とちぎサポステと略記)のスタッフとして参与観察を行い、若者たちが実際に直面している苦難に対応しうる支援のあり方を具体的に把握することを目指し、平成 20 年度-22 年度の基盤研究(C) (課題番号 20530781)「若年無業者問題の複合的構成の解明とオルタナティブな支援観の構築に向けた総合的研究」にて研究を開始した。

この研究の結果を通して、とちぎサポステに集う若者たちが不登校やひきこもり、あるいは就職の失敗等を経験し、それが原因となって対人関係に不安を持っていることが明らかになった。また、対人関係をうまくこなせない自分自身を非常に否定的にとらえ、それが自立への障害となっていることが明らかになった。

そうした彼らに対しては、例えば対人関係の能力を向上させるための話し方レッスンなどを実施することはかえって逆効果である。彼らは良好な対人関係を築きたいと思っ

てはいるが、それができないことが彼らの傷になっている。そこに話し方レッスンなどを導入すれば、やはり自分うまく話せないなど、ますます自己自身を否定的にとらえてしまうことになる。

そこで、「うまく話す」のではなく「ただなんとなく話す」「話さなくてもいいから一緒にいる」場を設定し、そこでどこちないながらも互いが関係を作っていくという「若者ミーティング」というプログラムを実施することにした。このプログラムは、プログラムを通して培った友達関係をベースに連れだってハローワークで就職活動をするなどの成果をあげた。

以上のように、報告者は対人関係能力の向上に資する支援とは異なる若者支援のあり方を提示した。しかし、大きな問題に直面することとなった。すなわち我々の社会が一度「脱落」した若者に対して、その若者が未熟だったからだとか甘えがあるからだなど、厳しく接しがちであるという問題である。つまり我々の社会は不寛容な社会になりつつある。ここにおいて新たに、この社会の不寛容さはなぜどのように生じてきたのかを問うという課題が生じた。

2 . 研究の目的

そこで本研究では、この社会の不寛容さないし排除性について理論的実践的な検討を実施することにした。

まずは我々の社会において排除が強められていくメカニズムについて、先に挙げた J. ヤングの排除型社会論も含め、A. ギデンズのモダニティ論や Z. パウマンの液状化社会論等を理論的な資源としながら検討することにした。

次いでまちづくり論等が蓄積してきた知見を整理し、中心市街地活性化施策や各種のまちづくり活動が現時点でどのような展開を見せているのかを検討することにした。

3 . 研究の方法

本研究において最も重要な研究プログラムは、これまで運営してきた「若者ミーティング」を継続し、若者たちが社会的自立へ向けて自己信頼を回復していく様子をさらに分析すると同時に新たな課題を発見するこ

とである。

第2に、若者たちの自立を阻むような地域社会の排除的な性格についての検討を進めることである。

第3に「若者ミーティング」に集うような若者に典型的な、“挫折を経験した後に、再度1歩を踏み出そうとする人”を排除しない社会のあり方を模索することである。この点に関しては、海外の事例にも積極的に学ぶ。具体的には、日本以上に若者の就労問題が深刻化している韓国における若者自立支援活動に関して、調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 若者自立支援活動への参与観察の継続の実施と新たな課題の発見

報告者は2008年より継続的に若者自立支援活動の場で、不登校やひきこもり、就職の活動の失敗などを経験した若者たちを対象にした「若者ミーティング」を運営してきた。彼らは能力的に著しく劣っているわけではないにもかかわらず、自己を過剰なまでに否定的に捉え、それが社会的自立を阻んでいる。彼らは、何気ない雑談をすることが苦手である。この雑談が出来る場を提供するべく、「若者ミーティング」は開始された。報告者はこの場にスタッフとして参加し、参与観察を継続した。

それと並行して報告者は、後述するA.ホネットやA.ギデンスの議論を手がかりに、「若者ミーティング」の場に集う若者たちが抱える困難の内実について検討した。その結果、彼らが社会的自立へと再度動き始めるには、他者からの承認を得て自己自身を信頼することができるようになることが必要だと結論に達している。

報告者は本研究においてもこの参与観察を最も重要な研究課題と位置づけ、「若者ミーティング」を継続した。

これまでの「若者ミーティング」の実践を通して、参加メンバーの中には社会的自立に向けた動きを開始する者が出始めている。このことは大きな実践的成果であるといえる。

しかしその一方、一部のメンバーにおいてはそれが十分には機能せず、居場所に「滞留」という状況が生じている。「若者ミーテ

ィング」の基本的なスタンスは、メンバーの自発性を重視し、出るも残るもメンバー自身に選択してもらうというものではあるが、現実的に見れば、居場所に滞留すればするほど、当該メンバーが社会へと一歩を踏み出すことがますます困難になると言わざるを得ない。この状況に対してどう対処するか。これは報告者が参与している「若者ミーティング」固有の問題にとどまらない、広く若者自立支援活動に共通する問題である。この課題について、「若者ミーティング」活動を更に続けながら、若者自立支援活動の現場に滞留する若者たちが抱える課題について理論的実践的に検討するという新たな課題を得ることになった。

(2) 地域社会の排除的な性格についての検討

この点については、当初予定していた、「若者ミーティング」にも参加している若者たちが企画・運営に参加する農産物の直売所の活動に関する調査が、直売所の運営形態の変化（若者たちが運営から外れた）もあり、十分な検討をすることはできなかった。この課題については、今後再度検討することにしたい。

(3) 排除型社会において若者が抱える困難とその克服の可能性の検討

本研究においては、排除型社会の特質と、排除型社会に生きる若者たちの自己アイデンティティの在り方、そして種々の挫折によって自己アイデンティティが傷つき、自己信頼を失って社会的自立を果たすことができなくなっている若者たちがいかに「回復」していくのかを明らかにした。

この成果については『ポストモラトリアム時代の若者たち 社会的排除を超えて』と題する書籍にまとめた。この書籍は3人の著者による共同執筆であるが、報告者はその中でもとくに2章「ポストモラトリアムの時代 リスク管理に忙殺される若者たち」と4章「孤立化からの回復 若者ミーティングで変わる若者たち」を中心に執筆した。以下、2章と4章について概要を掲載する。

2章

2章においては、まずJ.ヤングの排除型社会論を手がかりにして、排除型社会の成立について議論した。

ヤングによると、1950年代のアメリカにおいて“若者”というカテゴリーが登場した。これらの若者は社会に対して反抗する存在と見られたが、同時に“やがては大量生産と大量消費の担い手となり、幸せな家庭を形成して豊かな社会の一員になる存在”としてもとらえられた。そうした若者たちの反抗は、大人になるための試行錯誤ないし模索の表れであるとみなされ、心理学者のエリクソンなどにより、モラトリアムと呼ばれることとなった。ヤングによれば、このような社会は若者を排除せずその内部に取り込み、社会の一員にしていく。こうした社会のことを、ヤングは「包摂型社会」と呼んでいる。

しかしそうした社会の在り方は、ポストフォードイズム体制の台頭とともに変質していく。すなわち正規雇用の急激な縮小であり、流動的で不安定な非正規雇用の拡大である。このことはいわゆる「人間の排除」を生み出した。こうした社会の在り方を、ヤングは「排除型社会」と呼ぶ。

このような社会状況において、縮小したとはいえ存在はしている正規雇用集団と、急激に膨張した非正規雇用集団との間に雇用の安定性や所得に関する格差はもちろんのこと、生活の安定性等における著しい格差が生じている。他方、正規雇用であろうが非正規雇用であろうが、消費者としては同じく社会の一員である。換言すれば、人々は消費者であり続けなければ社会の一員としては認められず、排除されてしまう。

さらにヤングは排除型社会の度合いをさらに推し進める要因として、社会の多元主義化をあげている。ヤングは、これらの多元主義化は排除型社会においては“あの社会（文化）のことは私たちの社会（文化）とは本質的に違うから、そもそも理解することはできないのだ”という形で処理されるとみている。つまり多様な文化は互いに理解不能であると考えられている。このような状況では、もし異文化集団が自文化集団にとって理解不能な行動をとり、それが自文化集団の脅威となるなら、なぜそのような行動をとるの

かを考え理解するなどのことはせず本質的に理解しえない他者として排除するという対応がとられることになる。排除型社会においては、社会の多元主義化は、異文化同士の対立や排除を一層強めてしまう要因となってしまうのである。

このような排除型社会において人々はどう生きる（生きざるを得ない）のか。この点についてはA.ギデンズの再帰的自己論が参考になる。

ギデンズによれば、私たちが生きる社会は、専門家によって維持される高度なシステムが複雑に絡み合って形成されており、その全体を見ることが出来る人がどこにもおらず、何が起きるかわからない社会である。ギデンズは現代社会のこうした姿を「リスク社会」と呼び、私たちはリスクに対していかに対応するかを追われていると述べている。

私たちはこうした社会において、常に新たな情報や知識を入手しそれらを駆使して未来を予測しながら今を生きていく。しかし私たちがそのように未来を予測して現在の自分の行動をマネジメントしながら生きていくこと自体が、未来予測の攪乱要因となる。結果、私たちは常に微調整をし続けながら生きていかざるを得なくなってしまう。私たちがこうした作業を続ける限り常に不安定な状態にとどめ置かれ、“今とった選択は本当にそれでよかったのか、予測は本当にうまくいっているのか”と、不安を抱かざるを得なくなってしまう。こうした状態を、ギデンズは「実存的不安」と呼び、現代に生きる私たちの自己アイデンティティを脅かしているとみなしている。

報告者は以上のようにヤングとギデンズの議論を整理した上で、現代に生きる若者たちが排除型社会の中で失敗を避け未来をうまくマネジメントするべくリスク管理に忙殺されていること、それが若者の自己アイデンティティ形成と維持に大きな負担を強いっていることを指摘した。

4章

4章では、報告者が運営する「若者ミーティング」の概要を解説し、そこに集う若者たちの抱える問題がいかに解決されるのかについて、主としてA.ホネットの承認論を手が

かりに検討した。

「若者ミーティング」は、毎月1回、土曜の午後二時間程度のプログラムとして実施されている。基本的には未就労の若者たちが参加する、若者たち同士のふれあいを目的にしたミーティングである。参加する若者たちは、不登校やひきこもり、就職の失敗などの挫折を経験し、社会的自立を果たすことができない状態にあり、他者とのコミュニケーションに困難を抱えている。

ミーティングは大きく前半と後半の2部制で進行する。まず他者と安心して関わることを目的として一時間程度の時間を取って、自己紹介をかねたゲーム（毎回あるテーマに沿って行う：好きな食べ物について語る等）を行う。その後10分程の休憩を取りクールダウンする。休憩後は一時間程度のフリートークとなる。このフリートークは、当初は「誰が話しても、どんな話題を話してもいい」というゆるやかなものである。こうしたスタイルにしたのは、まずもって参加者が気負い無く話せるようにというねらいからである。

このミーティングを経て、参加する若者たちは、他者とのコミュニケーションに対する苦手意識を徐々に解消し、ミーティングの中で友人を得て、連れ立ってハローワークにおもむくなど社会的自立への一歩を再び歩みだしている。

こうした変化がいかに生じたのか。このことを考えるにあたっては、A.ホネットの承認論が参考になる。ホネットによれば、我々が確固たる自己アイデンティティを確立するにあたっては、他者との情緒的な強い結びつきに基づく自己信頼、一定の社会集団のメンバーシップを認められることに基づく自己尊重、そうした集団の中で自分の存在が評価されることに基づく自己評価という3つの承認の契機が必要となる。

このホネットの承認論から「若者ミーティング」に集う若者のモラルキャリアを見ると、彼らの自己信頼が欠損したり剥奪されていることがうかがえる。自己信頼とは、母子関係に典型的な無条件の愛情と保護のもとで獲得できる、「自分は一人でも大丈夫だ」といういわば根拠のない自己への信頼のことであり、それが未知の事柄（例えば就職活動）にも動き出せる原動力となる。ミーティングに集う彼らは、不登校やひきこもり、就

職の失敗、あるいはいじめなど、この自己信頼が著しく傷つけられる経験をしており、それが彼らの社会的自立への最も大きな障害となっている。報告者は、そうした自己信頼を回復する場として、「若者ミーティング」が機能していると結論づけた。

(4) 韓国における若者自立支援活動の調査

ソウル市における「ハジャセンター」および「ユジャサロン」の調査

2012年2月28日、韓国ソウル特別市、永登浦区にあるYoojaSalon代表のAki i氏に聞き取りを行った。YoojaSalonは、1999年より韓国のソウル特別市と延世大学校によって設立、運営されている若者支援のための総合的な支援センターであるHajacenterが立ち上げた社会的企業の一つである。

YoojaSalonでは様々な事情により学業を中断している若者たちに対して、主として音楽を通して自らへの自信をとりもどし、社会と再びつながっていく機会を提供している。

代表のAki i氏は、日本では一般にひきこもりと称される若者たちを「無重力青少年」と呼んでいる。この用語は、若者たちがどこか宙に浮いているような状態を表現するべく用いられている。しかし、Aki i氏はこの用語を用いて若者たちを非難するのではなく、むしろ社会が彼ら彼女らを適切につなぎとめることができていることを指摘する。その上でAki i氏は、無重力青少年をもう一度社会へと接続する「装置」として、「重力加速器」の必要性を指摘する。これは様々な段階および状態で二の足を踏んでいる若者にとって、その先に進む際のロールモデルとなるような大人のことである。かといって、「立派な大人」がそれにあたるわけではないとAki i氏は指摘する。例えばいったんは就職したものの離職し、その後「放浪」を経て再度就職して現在を生きているような大人など、若者たちのいまの気持ちを理解できる大人であることが重要だとAki i氏は指摘する。

こうしたAki i氏の考え方は、日本において同様の活動を展開し研究を進めている報告者にとっても刺激となると同時に、国を超えて、同じ考え方、アプローチを実践してい

るという事実につれ、若者の自立をめぐる問題が広く共有されていることを確認した。

ソウル市龍山地区 Binzip の活動に関する聞き取り

前述した YoojaSalon における Aki i 氏のインタビューには、社会的排除の憂き目にあった若者たちに対して住居を提供する活動について調査研究をしている延世大学の大学院生（ウンジ氏）も同席した。彼女のテーマは本研究のメインテーマと重なるものである。そこで研究対象となっているソウル市龍山区の解放村地区にある Binzip の活動を紹介いただき、活動の中心となっているジウム氏に活動の経緯や特質について 2013 年 3 月 10 日に、Binzip がある解放村にて聞き取りを行った。

Binzip とは、最大公約数的にいえば「諸事情で住むところを失った人々が共同生活を行いながら住む住宅、そうした住宅を軸にして展開される様々な活動の総称」である。

当初、研究代表者としては「諸事情により傷ついた若者たちが社会的自立に向けて新たな一歩を踏み出す気力を取り戻したとして、そうした若者を地域社会が十分に受け入れることができていないことが現在の問題であり、そうした問題を解決するにあたって、若者たちが地域社会の中で住むことを可能にしている Binzip の活動は参考になるのではないか」という作業仮説をもっていた。しかし Binzip は「若者を支援する、支援者の活動」を目的としているわけではないことが聞き取りを通して明らかになった。そうではなく、「当事者が日々生きること」を最大の目標とした、当事者による活動であり、さらにいえば「生きていくことそのもの」であることが明らかになった。

現時点では、報告者が運営する「若者ミーティング」においては居住に関する問題は生じていない。しかし、メンバーが滞留するという状況が徐々に生じている。このことは取りも直さず滞留するメンバーの年齢が上昇していること、メンバーの家族も高齢化していることを意味している。このことを鑑みれば、若者の社会的自立を支援する活動においても居住の問題は決して無視できない。今後の検討課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕(計 1 件)

村澤和多里, 山尾貴則, 村澤真保呂 2012
『ポストモラトリアム時代の若者たち - 社会的排除を超えて』 世界思想社 248 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山尾 貴則 (YAMA O Takanori)
研究者番号: 80343208

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし